

櫓門の復元

1. 平面

1) 一階平面 (図 3)

石垣に彫られた柄穴と柱痕から主柱通りの脇柱～脇柱間、脇柱～控柱間、控柱～控柱間の想定柱芯寸法を実測した。石垣にのこる柄穴と柱は片寄せで取り付け、柱は石垣面にのる部分と想定した(前述の発掘遺構からみた櫓門・棟門・土塀参照)。それによれば、主柱通りの脇柱～脇柱間は柄芯で 4221 mm (13.93 尺)、想定柱芯で 4138 mm (13.65 尺)、北の脇柱～控柱間 4532 mm (14.96 尺)、南の脇柱～控柱間 4593 mm (15.16 尺)、控柱～控柱間は柄芯で 4220 mm (13.93 尺)、想定柱芯で 4075 mm (13.45 尺)であった。このことから柱柄の中心は主柱通りの脇柱～脇柱間 14 尺、脇柱～控柱間 15 尺、控柱～控柱間 14 尺でほぼ計画していたことが推定された。また、発掘遺構から位置が不明である鏡柱位置も整った寸法で置かれていたことが考えられた。そこで鏡柱位置を間口 9 尺として石垣間の中央に想定した。この場合、潜扉は脇柱と鏡柱間には取れないが、藩主の利用する御廊下橋に通じる門であることから設けないこととした。

2) 2階平面

発掘遺構の礎石や土台さらに天守台石垣にのこる方杖柱の間隔から 2階平面の基準柱間を 1 間 6 尺あるいは 6.2 尺が想定された。6.2 尺は天守台下の石垣面痕跡からで、ほぼ 6.2 尺 3 間を四つ割とし、方杖柱を立てていたと推定される。妻側を四つ割にして柱を配置する例は本丸多門櫓(「福井城本丸御建物図」(松平文庫 1370))にもあり、梁間 16.5 尺で、この寸法は 18 尺から 1.5 尺を引いた整った寸法で、桁行は 6 尺間であった。両基準柱間でグリッドを作成し、発掘遺構平面にのせ、いずれが遺構と整合性があるかを検討した。この場合土台位置や独立柱が 6 尺で計画された方に整合性があった。さらにこの二つの状態をコンピューター上で再現し、古写真と同じ位置で同じレンズを用い撮影した場合にいずれが古写真の状態に近いかを検討したが、古写真に写る櫓門が一部であるためいずれも誤差の範囲内とのことで、決定出来なかった。そこで発掘の遺構の整合性(天守台側石垣に残る方杖柱からは 6.2 尺と考えた方が素直であるが、この部分は斜めの石垣面であり、平面遺構との整合性と前述および後述注の本丸建物の基準尺を重視した。)から梁間桁行方向を 6 尺グリッドとして復元することとした。

御廊下橋の復元において得られた基準尺は 1 間 6 尺であった。「福井城本丸御建物図」(松平文庫 1370)の瓦門には「上六尺二寸間四間」と多門櫓の特別な部屋である塗屋と同じく特記されており、普通は 1 間が 6 尺であったことが推測される。本丸から瑞源寺に移築された御小座敷や大奥御座之間は 6 尺の畳割と柱割が採用されていた。

扉の位置は雁木を上がりきった部分に 1 箇所(箇所)の入口戸が絵図から想定されたが、その位置、大きさは確定できなかった。発掘によれば、この部分に土台下の礎石とみられる石が 3 石みられ、そのうち両端の礎石間は 6 尺で、櫓台の雁木に面する部分の中央を 1 間としている。このことからこの部分は「御本丸御絵図」(松平文庫 1362)の中央に描かれる幅 1 間程の開口部と考えた。しかし、この開口の大きさでは両袖壁の 4.5 尺間に引き込むことは出来ず、戸幅を 4 尺と小さくしたものと考え、その礎石が中央北よりの礎石と考えられた。

幅 1 間の柱間に 4 尺程の引き戸を設ける例は本丸の多門櫓にみられる。

しかし、これだけでは柱位置を決定することはできなかった。それは後述のように軒先を支える構造、さらに外観のデザイン(窓、冠木、鏡柱、棧梁の位置)を考慮すると、いろいろなバリエーションがあり(図-4、5)、それぞれ長所短所があった。そこで構造、意匠、発掘遺構を総合的に判断して決定することとした。

2. 外部仕上げ

1) 屋根と軒裏

文献史料と遺構痕跡により石瓦葺であることが確かめられた。瓦門、多聞櫓、巽櫓、土塀の写る古写真から本丸の外回り建物の軒裏は大壁の塗籠で、軒裏には垂木形（波型、角型）を略した直線的な構造が想定された。（参考例 高松城北之丸月見櫓、備中松山城二重櫓、高知城黒鉄門東南西北塀 写真 3-1～3）。また、軒出の小さな多門櫓には腕木がみられるが、巽櫓や瓦門櫓はみられず、軒裏で隠れるような形かあるいはなかったもの（枯木を入れる）と想定される。このような形態で石瓦葺の建物は、絵図にみられる福井城天守と現存の丸岡城天守がある。軒先形状は構造に関係するので後述する。

屋根の照りや軒先の反りは瓦門櫓（第1回資料添付）や巽櫓にみられるので、建物の大きさに合わせた状態で適宜復元する。棟積や鬼瓦は瓦門櫓には笏谷石製で、一石による簡単なもの（棟は笠石と棟石2石）が使われ、本来は端部で多少反るので、これにならって復元する。妻側の軒出は石垣面に瓦の彫り込みなどがあり、塀あるいは石垣にすりつけるものとする。石瓦の形状や葺き方、軒先の納め等は既存遺構（丸岡城天守（写真 3-4、5）、正覚寺山門（写真 3-6））を参考とする。

石垣の石瓦痕跡と想定された2階の梁間の柱位置から屋根外形線を検討し、図化したものが図6である。この図の軒出は小さく一部分しか屋根が写っていないことによる計測誤差を考慮に入れると、ほぼ古写真の形状と一致するといえる。

2) 外壁

外壁は大壁の白壁が想定された。また、古写真の瓦門櫓や巽櫓には柱型（隅と中央間、但し長押下にも延びていたかは検討中）、長押、土台（検討中）、格子窓があるので、これにならう。また、窓上下に框上のものをもうける。格子窓位置については1階の通路が見渡せる西側壁面のみとし、東面は本丸指図にある雁木に面する出入口のみと想定する。

3) その他

小屋根の有無や形状、扉や柱等の装飾金物はわからないので、「福井城郭各御門其他見取絵」の櫓門の図を参考に復元する。（小屋根は櫓門の前後にあり、鍔金物では柱足元の沓金物、八双等あり。石落しは桜御門にあり。）

3. 内部仕上げ

内部仕上げは全くわからないが、「御櫓御多門其外御門預り并鍵」によれば、2階は「二階一口 御作事方預り 御本丸仮柱御矢場道具等入」とあり、倉庫であったことがわかる。前述のように福井城の本丸多門櫓の一部に内部が「塗屋」と特に明記される部分もあるが、多くの内部は特記がなく、櫓門ではそのような既述もなく、柱があらわしであったとみられる。このことと他事例の櫓門を参考にして、床は板張り、壁は土壁とすれば漆喰塗りまたは中塗り、あるいは板張り、天井は小屋組あらわしと想定される。入口は小さな櫓門であり、桜御門の2階へは石垣上の通路から延段で土台近くまで入口を高く上げている絵図があり（写真 3-7）、土間を設けず外部から直接入る形態とする。

4. 構造

遺構から南北にある石垣面に冠木・大梁を渡していることがわかり、さらに櫓台石垣上に土台（土居桁）を置き、石垣間で冠木と大梁上に架け渡した棧梁によって土台を支えていたことが想定された。棧梁の平面上の位置は上階の柱位置と同一場所が一般的であるが、まれに上階柱位置とは関係なく配置される櫓門（佐賀城鯨の門、上階は小さくなる）もある。2階櫓内の柱配置は床下の梁間中央（棟位置）に大梁が入っていた痕跡がみられず、梁間が3間と大きくもなく、存在したとは断定出来ないが、発掘礎石に棟通りに位置するものが1箇所あり、構造的に入っていたとするのが自然と考える。

石瓦の屋根を支える軒先の構造は、梁下に入れられた腕木状のものか（写真 3-10）あるいは梁（写真 3-8）あるいは登梁尻を桁より跳ね出して出桁をささえるもの（写真 3-11）と、出桁を用いず小屋内に入れられた桔木で支えるもの（写真 3-9）がある。石垣痕跡より得られた屋根線による想定櫓門の軒先構造を前述の架構で図化すると、図 7 のようになり登梁尻を桁より跳ね出すことは考え難い。また、桔木以外は柱と梁が折置きとなるから相対する位置に柱が基本的に必要となる。多くの櫓門は1間ごとあるいはそれに近い間隔で柱が相対して配置されているから、本発掘遺構を考えると、平面も簡単に結論を出すことが難しい。今回は詳細な柱配置は保留とする。



写真 3-1 高松城北之丸月見櫓 (国宝・重要文化財大全より)



写真 3-2 備中松山城二重櫓 (国宝・重要文化財大全より)



写真 3-3 高知城鉄門東南矢狭間塀 (国宝・重要文化財大全より)



写真 3-4 丸岡城天守屋根



写真 3-5 丸岡城天守屋根詳細



写真 3-6 正覚寺山門 (旧府中館門)



写真 3-7 桜御門 「福井城郭各御門其他見取絵」より
越葵文庫 福井市立郷土歴史博物館蔵

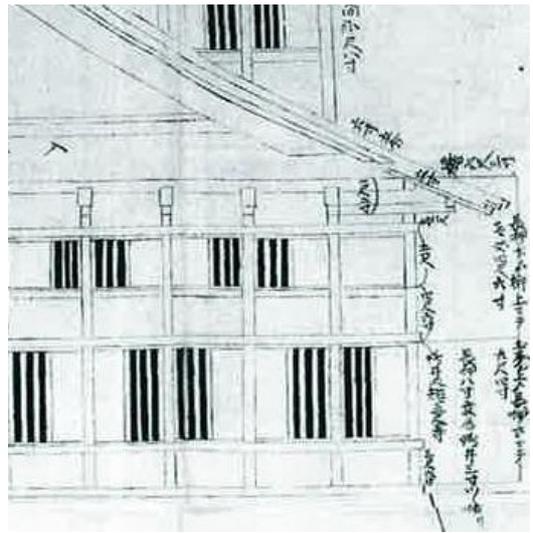


写真 3-8 御天守絵図部分 (福井城) 松平文庫 福井県立図書館保管

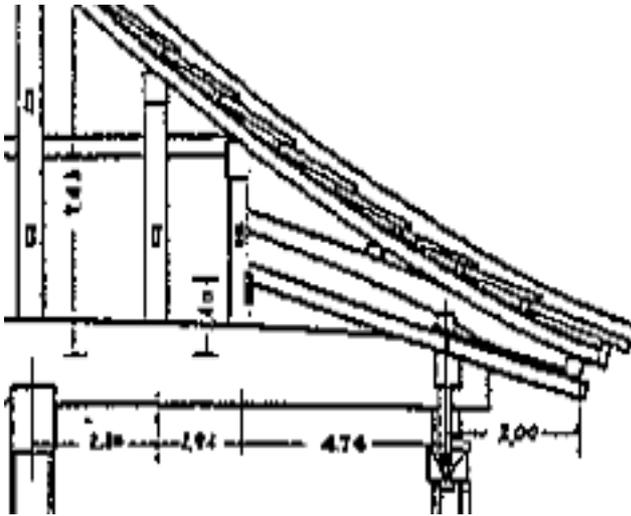


写真 3-9 丸岡城天守 重要文化財修理工事報告書より

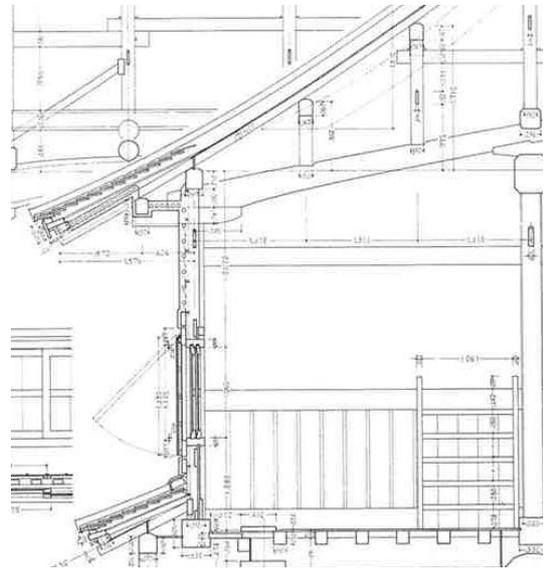


写真 3-10 江戸城清水門 重要文化財修理工事報告書より

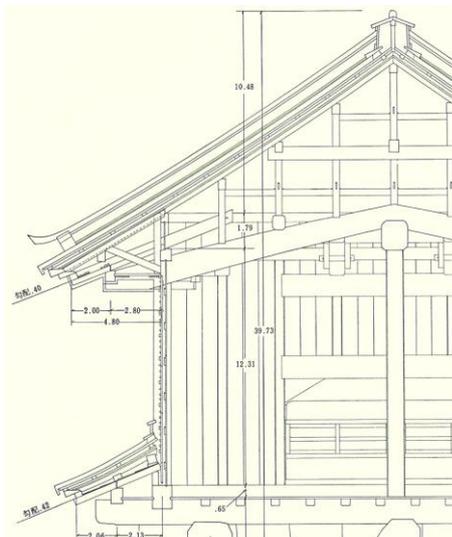


写真 3-11 金沢城石川門 重要文化財修理工事報告書より